

誕生日

ケーキのようにまつしろな孤独のこの部屋の、わたしの誕生日。もう二十三時。あと一時間でわたしの生まれた日は終わる。

わたしの気持ちにあわせて、部屋はまっ暗くしてある。サプライズを待つような気持ちの暗闇のなかで、すこし落ち着くような気持ちがする。

闇に可能性と期待を埋めずいてるわたし。誰か入ってこないかしら。それでわたしの生まれた日を知っていると、せめて伝えてほしい。何もいらぬ。できれば、見つめてほしい。

そのとき、スマートフォン画面が、ろうそくとして灯って、LINEの通知を知らせる。

『いいなあ〜彼氏が高級ホテル取ってくれたなんて！』

そうだ、この子にはそうやって火を渡しておいたんだった。

『いいでしょ！』と、自慢そうな顔文字と、スタンプ。

さらにろうそくは灯る。

『お鍋おいしそう。いい友達持ったね』と、スタンプ。

『そうなのー』と、スタンプ。

こいつには、そう火を渡しておいたんだった。

わたしと、わたしの部屋のぬいぐるみだけが、この火がにせものだって知ってる。にせものろうそくの、にせものの火。ゆらゆら現実と夢が揺れる。きれいだと、思う。

『デイズニーいいな〜！〜！〜！〜！〜！』

『家族仲良しだね』

『ちよっと、不倫はくない？笑』

ろうそくは次々と虚構を灯してゆれる。暗かった部屋が、ほのかなオレンジ色で影をつくらず照らされる。オレンジ色は、嘘とこんなに相性がいい色なのだとはじめて知った。

『そんなに高いごはん、ご馳走してもらってルンダー』

『すごいネ』

『うらヤマシイ』

『イイナア』

『ステキナタンジョウビダネ』

『ワタシモソナタンジョウビガオクリタイ』

あーあ、ろうそく多すぎるよ。わたしはまだそんな歳じゃないよ。

わたしはスマートフォンからろうそくを引き抜いて、どうでもよくなって、火のついたままベッドに投げ捨てる。

よごれた火が燃え広がって、わたしは欲にまみれた灰になる。

それは焼け痛いことだった。そして、どんなにか、気持ちのいいことだった。